

渡邊橋

〔遊囊臆記九〕長柄橋ハ文徳ノ御時、既ニ斷絶シケレバ、マシテ今ハンノ跡ダニ知ル人ナシ、凡天下ノ橋々多キ中ニ、賞咏今古ニ著シキハ、唯コノ橋ヲ第一トス。

〔夫木和歌抄二十一〕わたのべのはし

〔名所方角抄攝津〕渡邊橋 是も難波邊也、天王寺の北壹里也、淀川の末なり、渡邊いまは橋柱ばかり也。

〔攝陽群談七〕渡部橋 同成西郡ニ屬ス、方角所指不詳、渡部ヤ大江岸ト續クラ以テ、大江橋ノ一名

トスル歟、今謂渡部橋ハ俗名所ニ比シテ、玉江ノ橋東ニアリ、

〔夫木和歌抄二十一〕六帖題やしる

權僧正公朝

わたのべやはしのうはてをはじめにておほかるきちのつまやしるかな

〔太平記六〕楠出、張天王寺事、附隅田高橋并宇都宮事

元弘二年五月十七日ニ、先住吉天王寺邊へ打テ出テ、渡部ノ橋ヨリ南ニ陣ヲ取ル、然間和泉河内ノ早馬敷並ヲ打、楠已ニ京都へ責上ル由告ケレバ、洛中ノ騷動不斜、武士東西ニ馳散リテ、貴賤上下周章事窮リナシ、斯リケレバ、兩六波羅ニハ、畿内近國ノ勢如雲霞馳集テ、楠今ヤ責上ルト待ケレ共、敢テ其義モナケレバ、聞ニモ不似、楠小勢ニテゾ有覽、此方ヨリ押寄テ打散セトテ、隅田高橋ヲ兩六波羅ノ軍奉行トシテ、四十八箇所ノ箒并在京人畿内近國ノ勢ヲ合セテ、天王寺へ被指向、其勢都合五千餘騎、同二十日京都ヲ立テ、尼崎、神崎、柱松ノ邊ニ陣ヲ取テ、遠箒ヲ燒テ、其夜ヲ遲シト待明ス、楠是ヲ聞テ、二千餘騎ヲ三手ニ分ケ、宗トノ勢ヲバ住吉天王寺ニ隱テ、僅ニ三百騎計ヲ渡部ノ橋ノ南ニ磬サセ、大箒二三箇所ニ燒セテ相向ヘリ、是ハ態ト敵ニ橋ヲ渡サセテ、水ノ深ミニ追ハメ、雌雄ヲ一時ニ決センガ爲也、去程ニ明レバ、五月二十一日ニ、六波羅ノ勢五千餘騎、所々ノ陣ヲ一ニ合セ、渡部ノ橋マデ、打莅テ、河向ニ引ヘタル敵ノ勢ヲ見渡セバ、僅ニ二三百騎ニハ不